分科会２　題材のアップデート　　実践発表３

学 校 名：目黒区立第十中学校
対　　象：第２学年
授業者名：原田　友恵

１　題材名　「ジャポンに閃きを得た！」

２　対象学年と学習指導要領上の位置づけ
第２学年　Ｂ鑑賞（１）イ（ィ）、〔共通事項〕

３　題材の目標と評価規準
(1)　題材の目標
ア　「知識及び技能」に関する目標
知①形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解する。
②造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉得ることを理解する。

イ　「思考力、判断力、表現力等」に関する目標
鑑①日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質などから、伝統や文化のよさや美しさを感じとり、諸外国の美術や文化との相違点や共通点に気付き、美術を通した国際理解や美術文化の継承と創造について考えるなどして、見方や感じ方を深める。

ウ　「学びに向かう力、人間性等」に関する目標
態鑑①美術の創造活動の喜びを味わい、主体的に作品や美術文化などの鑑賞に取り組む。

(2)　評価規準

ア　知識・技能	イ　思考・判断・表現	ウ　主体的に学習に取り組む態度
知①形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解している。 ②造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉得ることを理解している。	鑑①日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質などから、伝統や文化のよさや美しさを感じとり、諸外国の美術や文化との相違点や共通点に気付き、美術を通した国際理解や美術文化の継承と創造について考えるなどして、見方や感じ方を深めている。	態鑑①美術の創造活動の喜びを味わい、主体的に作品や美術文化などの鑑賞に取り組もうとしている。

４　指導観
(1)　題材観、分科会テーマとの関連
学習指導要領の第２学年及び第３学年Ｂ鑑賞（１）イ（イ）に、「日本の美術作品や受け継がれてきた表現の特質などから、伝統や文化の良さや美しさを感じ取り愛情を深めるとともに、諸外国の美術や文化との相違点や共通点に気付き、美術を通した国際理解や美術文化の継承と創造について考えるなどして、見方や感じ方を深めること。」とある。
本題材は、歌川広重が描いた「名所江戸百景　亀戸梅屋敷」の模写をしたフィンセント・ファン・ゴッホの「梅の木」をきっかけに、「なぜ類似した２枚の絵が存在するのか。」「2 枚の絵の関係性は何なのか。」考え、ジャポニスムについて知ることを通して、当時の浮世絵や北斎漫画といった日本美術と西洋の美術

作品の相違点について考え、西洋の芸術家に日本の作品の特色や美意識がどのように影響を与えたのか考え、話し合い、批評しあう内容として設定している。

分科会テーマ「題材アップデート」との関連

美術の鑑賞の授業といえば、試行錯誤がなされているものの、第2・3学年の美術に割り当てられた年間３５時間という時間の中で、A表現と関連した製作した作品の相互鑑賞以外のB鑑賞に視点を置くと、まだ教師による作品についての解説や作家の逸話など美術史的な知識を与える傾向がみられる。生徒に感想を書かせたり、意見を聞いたりしたとしても、それをもとに授業をするゆとりや時間がなく、生徒の感じ方や考え方が授業の中で十分に活用されているとはいえない。美術作品にまつわる歴史や固有の情報を教えるのではなく、作品に関する自分の見方、感じ方や考え方を他者とコミュニケーションし、対話を通して個々の見方や価値意識を深めたり広げたりすることを目指す必要がある。

鑑賞のねらいに迫るために、教師が知識として教えるべき内容と、生徒が自ら考え深めていく内容とのバランスや授業の流れを考える必要がある。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を図るにあたり、学習指導要領には、改善の具体的事項である「感じ取ったことや考えたことなどを自分の価値意識をもって批評しあうなどして、自分なりの意味や価値をつくりだしていくことができるように指導の充実を図る」こととある。

本題材は、授業の導入場面で、1枚の絵を他者が口頭で説明をし、それを聞いてイメージを膨らませる活動がある。作品に描かれたものや感じたこと（モチーフ・情景・色や形）を「受容」し、質問を繰り返すことで「交流」し、類似した日本と西洋の2枚の絵にたどり着くという過程を通して、人によって感じ方や捉え方が違うことに気付き、作品に対する関心や理解を深め、生き生きと作品に関わっていくことができるのではないかと考える。そして、なぜ類似した2枚の絵が存在するのか、2枚の絵の関係を考え日本と西洋の作品の相違点と共通点を探し、深める活動の前に、教師が時代背景や歴史、ジャポニスムが起こった経緯を教えることで、さらに多角的に「見方・考え方」を習得し学びの中で働かせることができると考える。また、1人1台の学習用端末を活用し、各自がじっくり作品の細部まで鑑賞できることが、作品に関する自分の見方、感じ方や考え方を深める手立てとして捉えている。

(2)　生徒観

第1学年では、印象派について学習をした。チューブ入り絵の具やカメラの発明との関連性や印象派の画家たちが光を求めて屋外にキャンバスを持って出ていったことや、クロード・モネが光の移り変わりを捉えるために連作という方法をとったことなどを学習した。第2学年の生徒は、男子生徒の人数が多く、明るく活発である。しかし、制作の際は、自分の世界に入り込むと黙々と作品に向き合い、制作にのめり込む姿が見られる。本題材の導入部分で行う作品を当てるゲームである「絵！？なんの絵！？」は、今まで印象派やシュルレアリスムの作品を授業の導入部分で行い、作品に親しむ活動をしてきた。作品のモチーフや形や色のヒントをもとに、懸命に想像して模写をする生徒もいれば、口頭で出されるヒントを主に言葉でメモをする生徒もいるが、意欲的に活動に取り組む様子が見られる。

(3)　教材観

長い鎖国時代、長崎出島から海を渡った「有田焼」の包み紙とされた葛飾北斎の「北斎漫画」の存在は、その後のジャポニスムという30年以上も続いた西洋での日本文化の大流行のきっかけになったとも言われている。鎖国時代、世界から閉ざされた神秘的で謎に包まれた「日本」という国が、19世紀後半の万国博覧会において、当時の西洋人に大きな影響を与えた。その万国博覧会に足を踏み入れた日本の幕末の要人達の姿を初めて目にした時の、西洋人の驚きはいかほどだったかだろうか。彼らが身に付けている刀をはじめ、目を見張るほど装飾的なデザインの精巧を極めた物を身に付けた姿は、まさに動く美術館・博物館のようであったとも言われている。

本題材は、日本の浮世絵などの美術作品が、当時の西洋に与えた影響に迫る中で、当時の日本美術の特色や美しさについて気付き、自分なりの価値を発見し、対話を通して深めていく活動である。その過程で、日本と西洋の表現の共通点や相違点について、自分なりの見方や考え方をもって話し合い、批評しあい深めていく。さらには、日本という国独自の美的感覚、身近な生き物や何気ない日常の一瞬の光景などを画家が見つめ、表現していたことについて気付かせ、愛好する気持ちを育てたい。

5　題材の指導計画と評価計画(全２時間)

時	目標	○ 学習内容　・ 学習活動	評価規準(評価方法)		
			ア	イ	ウ
第１時	意欲的に、ジャポニスムの経緯について知り、日本と西洋の美術文化を愛好する心情を深め、鑑賞する学習活動に取り組む。 ◈ゲーム的な遊びを通し、美術作品に親しみながら作品について、主体的に調べることができるようにする。 ◈①モチーフ②色や形③感じたこと④絵から想像できる音などを、質問をすることで、造形要素や造形原理について、分析的な見方や考えが体験できるようにする。 ◈作品への多様なアプローチや感じ方の違いに気付き、互いに異なる点を認め合えるようにする。 ◈学習用端末で調べる中で類似した 2 枚の絵があることに気付き、共通点と相違点、また関係性について考えることができる。	○「え！？何の絵？」ゲームをする。 ・代表者 1 名が、他の人に絵（ゴッホ作･「梅の花」）が見えないようにしながら、口頭で絵のヒントを伝える。ヒントをもとに、絵を描く、もしくは想像しながら模写をする。 ・7 分ほど経過したら、全員学習用端末を開いて、ヒントをもとに絵を探し出す。 ○「梅の花」（フィンセント・ファン・ゴッホ作）と「名所江戸百景　亀戸梅屋敷」（歌川広重作）の類似した 2 作の存在を知り、共通点と相違点、また関係性について考える。	知①② 授業観察 発言	鑑① 授業観察 発言 ワーク シート	態鑑 授業観察 発言 ワーク シート
	ジャポニスムが西洋美術に与えた影響について考えることで、19 世紀後半におけるジャポニスムの作品の特質、当時の西洋の芸術家の感じ方について考えを深めることができる。 ◈長い鎖国時代に唯一貿易を許された出島から、西洋に渡った有田焼の包み紙に使用され影響を与えたと言われる北斎漫画の存在、パリ万博での幕末の要人の服装や装飾品が当時の西洋人にいかにインパクトを与えたか、教師がパワーポイントを使い、ポイントを絞って説明する。	○ジャポニスムの経緯についての説明を聞いて理解し、日本の美術文化が世界に大きな影響を与えたことを知る。			
	浮世絵など日本の美術作品と 19 世紀の西洋の美術作品の表現の相違点や共通点に気付き、比べることができる。 ◈日本の①平面的（線で構成）②明快な色面③大胆で奇抜な構図、西洋の①明暗による立体感②明暗による立体感③写実的な陰影などの相違点に気付かせる。	○日本の美術作品と西洋の美術作品を対比し、西洋の芸術家達は日本の作品のどのような所に魅力を感じ、惹きつけられたのか、自分なりに考える。 ・学習用端末アプリ、ロイロノートのシンキングツールを使用し、各自がじっくり作品を鑑賞し、考えることができるようにする。			

第２時	浮世絵など日本の美術作品と19 世紀の西洋美術作品の表現の相違点や共通点ついて、班の人と意見を交換し、共有することで考えを深めることができる。 ◈当時の日本人が、何気ない日常の一瞬の光景である身近な生き物などを見つめ、表現していたことなどを、発問や対話を通して、気付くことができるようにする。 ◈ラミネート加工した共有の図版に気づいたことを直接書き込みながら、話し合うことで、19 世紀後半におけるジャポニスムの作品の特質、当時の西洋の芸術家の感じ方について考えを整理し、深めることができるようにする。	○西洋の芸術家達は日本の作品のどのような所に魅力を感じ、惹きつけられたのか、班で話し合う。 ・対話的な学びを行う為に、班で話し合う際は共通の図版を使用する。 ○発表し、クラスで共有する。	知①② 授業観察 発言	鑑① 授業観察 発言 ワークシート	態鑑① 授業観察 発言 ワークシート

６　指導に当たって

授業で使用する作品は、液晶プロジェクターで投影する時と、カラーレーザープリンターで鮮明に印刷した図版を使用する。また、個人で作品を鑑賞し、考える際には学習用端末の画像をもとに活動を行う。

７　発表を終えて

発表を終えて、「今回の鑑賞授業を、今後どのように表現の授業にいかしていくか？」という質問を頂いた。この鑑賞の授業を通して、得た色彩や構図の捉え方や活用の仕方を、生徒自身が自らの表現に向き合う際の足掛かりしてほしいと考えている。また、鑑賞の授業と表現の授業を相互的に、捉えて題材設定や年間指導計画をたてていきたい。

分科会２　題材のアップデート　　実践発表４

学 校 名：世田谷区立千歳中学校
対　　象：第１学年
授業者名：清水　健次

１　題材名
「花鳥風月」～心の季節、色、形～

２　対象学年と学習指導要領上の位置づけ
第１学年　Ａ表現（１）ア、（２）ア、Ｂ鑑賞（１）ア[共通事項]

３　題材の目標と評価規準
（１）題材の目標
ア「知識及び技能」に関する目標
知①形や色彩などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解するとともに、造形的な特徴などを基に全体のイメージとして捉えることなどを理解できるようにする。
技①材料や用具の生かし方を身に付け、意図に応じて工夫して表現できるようにする。

イ「思考力、判断力、表現力等」に関する目標
発①対象や事象を見つめ感じ取った形や色彩の特徴から想像したことを基に見立てたり、心情と関連付けたりして主題を生み出し、全体の部分との関係などを考え創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練ることができる。
鑑①造形的な良さや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げることができるようにする。

ウ「学びに向かう力、人間性等」に関する目標
態表①美術の創造活動の喜びを味わい楽しく感じ取ったことや考えたことなどを基に表現の学習活動に取り組むことができる。
態鑑①美術の創造活動の喜びを味わい楽しく鑑賞の学習活動に取り組むことができる。

（２）評価規準

ア　知識・技能		イ　思考・判断・表現		ウ　主体的に学習に取り組む態度	
知①	形や色彩などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解するとともに造形的な特徴などを基に全体のイメージとして捉えることなどを理解している。	発①	対象や事象を見つめ感じ取った形や色彩の特徴から想像したことを基に見立てたり、心情と関連付けたりして主題を生み出し、全体と部分との関係などを考え、創造的な構成を工夫し、心豊かに表現する構想を練っている。	態表①	美術の創造活動の喜びを味わい楽しく感じ取ったことや考えたことなどを基に表現の学習活動に取り組もうとしている。
技①	材料や用具の生かし方を身に付け、意図に応じて工夫して表現している。	鑑①	造形的な良さや美しさを感じ取り、作者の心情や表現の意図と工夫などについて考えるなどして、見方や感じ方を広げている。	態鑑①	美術の創造活動の喜びを味わい楽しく鑑賞の学習活動に取り組もうとしている。

4　指導観

（1）題材観、分科会テーマとの関連

色彩の学習の導入としては、生活に身近なところから色彩に興味を持たせるために、広告などの参考例を充実させて体感や実感から生まれる「発見」をもとに考えさせ、理解を深めていく。色彩に関する知識や専門用語を知ることも大切ではあるが、知識習得だけに偏らないよう配慮し、１時間の授業の中に必ず制作の時間を確保して理解と表現が繋がりながら展開できる授業づくりを行う。本題材で学習する色彩の理解を自分の作品へ反映させ、独自のテーマや感情のイメージを意図的に着彩し表現できることの楽しさや喜びを「生き方」としての価値につなげる。

分科会のテーマである「題材のアップデート」については、これまでの色彩による学習では平塗りによる平面構成の作品を制作しており、題材の目標・評価においても技能面の習得に重きをおいていた。本題材では、ただ技能を身に付けるだけでなく、幅広い絵の具の表現方法を体験し獲得していく中で、独自の世界観から生まれる主題に合った色彩や形を造形的な視点で見つめ、作品に表すことのできる表現の能力を育成する。

（2）生徒観

１学年の１学期では「デッサン」の制作から物を見つめる力と光と影を意識した立体の描き方を学習している。また、基本的な「色彩の学習」と絵の具（ポスターカラー）の使い方を事前に学習する。本題材では身に付けた技能を工夫しながら、独自の世界を表現する作品制作に展開していくが、主題を自身で見つける作業の際に思いつかなかったり、困難を感じたりする生徒が出ることが予想される。主題設定の発想を広げるためのきっかけとしてタブレットを使用し、キーワード検索や画像検索をさせることで独自の世界観を深めさせていく。

（3）教材観

本題材は色彩に関する全体の指導計画として、色彩の知識（基本の性質と感情効果）→ポスターカラーの技能（平塗・とモダンテクニック）→表現活動（作品制作）→鑑賞（生徒同士の相互鑑賞）と展開していく題材として設定している。色彩に対して興味や関心をもちながら主体的な学習と制作ができるように、授業ごとに気付きと発見を大切にしながら作業を進めるようにする。自分の制作過程を振り返ることができるように、制作過程をタブレットのカメラで撮影し、よりこだわりのある作品を完成させることができるような制作環境を整える。

題材名にある「花鳥風月」や「季節」「掛軸」などのキーワードから日本の伝統的な色彩や造形的な美しさなども紹介しながら、主題のもとに表現された繊細な色彩表現やレイアウトを学び、作品の世界観を広げさせていく。また、縦長の画用紙を使用することで、普段は描かないバランスの構図に新鮮さと面白さを感じさせながら制作に取り組めるようにする。

作品完成後の鑑賞時には自分にはない友達の作品の個性を発見させ、造形的な視点から見付けた工夫やよさを鑑賞シートに記入させる。最後の振り返りでは独自の配色で着彩し、自身のイメージを実体化できたかを考えさせる。

【教材・用具】

教員：画用紙（縦長のものを複数色）、はさみ、のり、ワークシート、アイデアスケッチ、参考資料

生徒：絵の具セット（ポスターカラー）、歯ブラシ、ストロー、学習用タブレット

5　題材の指導計画と評価計画　（全６時間）

時	目標	学習内容・学習活動	評価規準 評価方法		
			ア	イ	ウ
第１時	・季節から連想されるものや感情を考える	春…桜、温かい、ピンク　夏…海、元気、水色 など、思いついたものを自由に発言させる。	知①	発①	態表①
	・感情から連想される「色」を考える	優しい…黄色、ピンク　悲しい…青、紫 切ない…（　　）　恋愛…（　　）			
	・題材の目標を理解する。 「花鳥風月」 自分だけの心の季節を表現しよう。	・感情や心は移り行く季節と同じように１色では表せない奥深いものであることに気付かせる。 ・これまでの色彩の学習と絵の具の技法が本題材の 制作と表現に繋がるように説明をする。			
	・ワークシートを作成する。 ①表現する「感情」の主題を設定する。 ②感情と関連付けた「季節」を決める。 ③設定した主題の配色を決める。	・参考作品をプロジェクタで投影しながら、作品のテーマや形・色彩のデザインの工夫を説明する。 ・作品は縦長の掛軸風の構図にする。 ・今の自分を見つめ、考えていることや感じていること、体感したことなどから設定を考えさせる。 ・「○○な春」「○○の秋」など季節と感情を関連付け、その理由と意味も設定させる ・色彩の感情の効果を活かした配色や日本の伝統色なども効果的に使うことを伝える。			
	・アイデアスケッチを描く。（色鉛筆で着彩） 主題を基にイメージに合うようなデザインを描く	・必要な場合は Ipad を使ってアイデアを広げる。 ・主題設定した「感情」の色や形は具体的なものや場所でもよいが、固有色や元の形状に縛られすぎないように声かけをする。 ・時間の足らない生徒は宿題にする。			
第２時	・アイデアスケッチを基に表現方法を試作する。	・ベースとなる画用紙を複数色用意し、選択できるようにする。 ・画用紙を切ったり、別紙に着彩したものをコラージュしたりして、自分らしい表現を追究させる。 ・混色をして独自の色彩をつくるようにする。	技①	発①	態表①

第3時 ～ 第5時	・作品制作　着彩 （ポスターカラー）	・デザインと配色に心情と関連付けた意味を感じながら着彩ができるようにする。 ・技法を工夫し、独自の表現ができるように指導・助言をする。	技 ①	発 ①	態 表 ①
第6時	・相互鑑賞をする。	・友達の作品を鑑賞し、自分にはない友達の作品の個性を発見させ、見付けた工夫やよさを鑑賞シートに記入させる。 ・自分の制作を振り返り、独自の配色で着彩し、イメージを実体化できたかを考えさせる。		鑑 ①	態 鑑 ①

6　指導に当たって

・ポスターカラーによる平塗やモダンテクニックの技法を習得するだけでなく、身に付けた技法を独自の世界を表現するための技能として創意工夫しながら制作できるようにする。

・自己の心情を見つめ直し、季節・色彩・形と関連づけた、自分らしい独自の世界を表現することの面白さと、心豊かに発想する喜びを感じることができるようにする。

・相互鑑賞の活動から、心の在り方や感じ方は人それぞれであることを実感させ、集団や社会の中での「生き方」において自己肯定感と他者理解につながるよう指導する。

7　実践発表を終えて

【成果】

モダンテクニックでの制作を通して、絵の具の技法の表現が広がっただけでなく、作品の世界観や独自性もこれまで以上に大きく広げることができた。また、心情と関連付けた色や形が感情にもたらす効果を体験・実感・理解しながら、造形的にとらえていく制作をさせることができた。発表・鑑賞の活動では、自分自身が作品に込めた思いを言葉で伝え、他者の作品への思いも感じとることで、作品の美しさ、作者の心情・工夫を味わうことができた。

【課題】

広がりを持たせる自由度の高い題材設定は、時に生徒を迷わせてしまう側面をもっている。「心と季節」という主題設定に悩んでしまう生徒もいたことから、ある程度の条件を絞った部分と自由に発想させる部分のバランスをとっていく必要がある。また、本題材を表現力の高い２・３学年で扱うことで、より深い作品制作になることも予想される。評価においては、モダンテクニックの偶然性から生まれる絵の具の現象と、主題や心情との関連性を含めた評価をする必要があるため、色やデザインの技能面に偏らないような丁寧な見方が重要となる。

題材全体を通して制作する生徒たちの様子からは、モダンテクニックの偶然性に一喜一憂する姿や、主題設定した世界のために表現を試行錯誤しながら創意工夫する姿があり、心豊かに楽しみながら制作できた題材となった。今後も創造活動の喜びを感じ、育てる題材の研究を深めていきたい。

第２分科会

題材のアップデート

発表者　原田　友恵（目黒区第十中学校）
　　清水　健次（世田谷区立千歳中学校）
助言者　上野目　浩一（大田区立大森第一中学校長）
記録者　村上　櫻子（世田谷区立世田谷中学校）

『ジャポンに閃きを得た！』原田　友恵

１　発表者から

対象は２学年。ジャポニスムは、学習指導要領の第２，３学年Ｂ鑑賞（１）イ（イ）の内容に合致した内容である。この授業で、ジャポニスムの魅力を再発見し、時代や新しい教育環境に合わせた題材へとアップデートを試みた。

本題材は、歌川広重の『名所江戸百景　亀戸梅屋敷』を模写したゴッホの「梅の木」をきっかけに、類似した二枚の絵が存在する理由、関係性を考えジャポニスムについて知ること、そして当時の浮世絵や北斎漫画といった日本美術と西洋の芸術作品の相違点について考え、西洋の芸術家に日本の作品の特色や美意識がどのように影響を与えたのかを考え、話し合う内容として設定している。作品にまつわる歴史や固有の情報を教えるだけではなく、作品に関する自分の見方、感じ方や考え方を他者と共有し、会話を通して意識を深め、広げることを目指す必要がある。また学習用端末の有効活用としては、これまではスクリーンに映し出して鑑賞していた図版を自分の端末で拡大し、見比べながら細部まで鑑賞することが可能となり、学習環境からのアップデートとなった。

２　参加者から

【質問】この授業の着地点、この時間に学んだことを、どう作品に生かすようにしているのか。
【回答】今後ダ・ヴィンチの『モナリザ』等で鑑賞授業を深めながら、一点透視図法などの表現につなげていきたい。

『花鳥風月～心の季節、色、形～』清水　健次

１　発表者から

第１学年で絵具を使った作品制作。題材の目標は、「形や色彩が感情にもたらす効果を理解し、意図に応じた表現ができる（知識・技能）、心情と関連付けて、自ら主題を生み出し、鑑賞の際には作品にこめた作者の心情や意図や工夫を感じ取る（思考・判断）、表現、鑑賞の活動を通して創造活動の喜びを味わう（学びに向かう力）」である。

授業実践までに、デッサン、色彩に関する基礎知識等は学習している。そこに先ほどの題材目標を加え、創造活動の喜びを感じさせるということを大きなねらいとした。また生徒にとって表現することの楽しさを実感できる題材を目指した。

この題材でのアップデートポイントは四つある。一つ目は、感情や季節をもとに各自が主題設定をすること。二つ目は、モダンテクニックを取り入れたこと。三つ目は掛け軸風の作品に仕上げるということ。四つ目は、発表、鑑賞で作品に込めた思いを伝えること。発表では技法や作業などの説明だけではなく、なぜその技法を使ったのか等、自分の気持ちを大切に発表させた。

導入時にはワークシートを使用し、「自分の感情を言葉にすること、季節を発想のきっかけにすること」から始めた。またタブレットを使用し、キーワードや画像検索をさせることで、発想が広がるようにした。制作ではモダンテクニックを取り入れることで表現の幅を広げた。モダンテクニックの魅力は偶然からできる色彩と形にあるため、生徒は予想できない表現に一喜一憂していた。何度でも練習し、失敗してもよいと伝えながらどんどん描かせると、段々と意図的にモダンテクニックが使えるようになり、本番制作時には、表現したい世界のために

工夫をするようになっていった。また掛け軸にしたことで、縦長の形の新鮮さ、作品ができていく過程で満足感や特別感を感じている姿も見ることができた。自分の気持ちに主題を見つけ、工夫しながら作品を制作することで、大きなねらいであった創造活動の喜びと味わいを感じさせることができたと思う。今回、表現の幅が広がり、絵具の表現だけでなく作品の世界観を大きく広げることができた。

２　参加者から

【質問】なぜ１年生で設定したのか。

【回答】平塗りだけの制作が難しい生徒がいること、また小学校で自由な表現をしてきたことを踏まえて設定した。

【質問】季節と自分の感情、そしてモダンテクニックとのつなげ方、また抽象画としての指導はあったのか。

【回答】主題は心情表現だが、「今の気持ち」を聞くのは難しいため、「では季節ではどれか」と考えさせた。「見て描くという具象」ではなく、「感情を表現するという抽象表現」体験した、ということを教えたい。

３　助言者から

社会や学習指導要領、子どもたちの変化によって、もともとあった題材でもその時々に合わせてアップデートさせてその価値を共有する必要性がある。「この題材をやらせたい」というのではなく「こういう力をつけさせたいためにこの題材を使う」ことが大切である。分科会の３つのテーマは「これらをやることによって、生き方につながる美術教育が達成できるようにする」という手段なのである。平成２５年の文科省が行った学習指導要領実施状況調査の結果が出ている。私たちは（願望含め）、「図工美術は子どもみんなが好き」「だから自由に表現させたい」という共通理解があるが、実は嫌いな子どもも一定数は存在する。実際に子どもたちからは、「思うように描けないからいやだ」「作って家に持ち帰っても、結局は捨ててしまう」という返答があった。また「美術を学べば生活に役立つ」と思っていない子どもたちもいる。もっと「子どもにわからせる工夫」というものが必要であると考えられる。こういう力が身につく、試行錯誤の中で頭の中でまとまっていく経験ができる、作品を見て感じたことを共有することによって人の考えていることを理解できる、自分の好みが理解できてくる、このようなことで、美術文化が継承できていけばよいのではないだろうか。今回の実践発表をヒントに、ぜひ多くの仲間で自身の授業実践に生かしていければよいと感じた。それぞれでまたプランを練って良いものにしていただきたい。それがこれからの我々の責務である。